

海外学会に参加する意義 - 2025 Academy of Management (AOM) Annual Meetingでの経験を通じて -

船 越 多 枝

(大阪経済大学経営学部経営学科准教授)

1. Academy of Management (AOM) 2025 概要

7月末に開催された、2025 Academy of Management (AOM) Annual Meetingへの参加は、いち研究者として本当に貴重な経験となりました。ご存じの方も多かもしれませんが、AOMはアメリカで最大級の経営・組織系の学会です。本年は、初めてアメリカではなく、デンマーク・コペンハーゲンのベラ・センターという広大な会議施設で開催され、参加者は13,000人を超えたと聞いています。発表はなかなかハードルが高い学会ではありますが、通常、6-7日間の期間に、4,000近くのProfessional Development Workshop(研究者の研究・教育力向上のワークショップ・セッション:PDW)、シンポジウム、研究発表等が行われます。そこでは、最新の研究動向、研究や教育の方法論、進行中の研究が共有されるセッション・発表が、朝は8:00ごろから夕方18:00頃まで、長ささまざまなタイムスロットで、1日中開催されます。PDWは興味深いセッションばかりで、例年、多くの良質なセッションの時間が重なり、どちらに行くか悩みに悩む…ということが慣例です。今年はポスターセッションもあり、いつも以上に共有スペースも交流や活気がありました。

さて、発表はなかなかハードルが高い学会だと申しましたが、今回、私の共同研究グループ(日本人のグループ)は、通常発表ではなく、セッション内の発表に選んで頂き、セッション内のディスカッションテーブルで発表する機会を得ました。このように、色々な国の研究者が議論できる場が、いわゆる通常の「学会発表」形式以外でも多く設定されるのが、AOMの良いところだと思います。



ベラ・センターの中庭にて。ここに毎日5-6台のキッチンカーがやってきて、軽食を取ることもできます。覚悟していましたがデンマークの物価はとて高く、キッチンカーはサンドイッチが70-75DKK(約1,600円程度)といった感じでした。

2. 初めての Session Facilitator としての経験

今回は自身の研究発表はもちろんのこと、他にも多くの刺激を受ける出来事を経験しました。1つ目は、今年のはじめて、セッション主催側として2つのセッションのメンバーになったことです。日本の視点から、コメントを言ったり、場を温めるファシリテーターの役割を担いました。1件目は、“DEI’s Global Ambassadors Broadening the AOM Experience for

Emerging International Members”というセッションです。これは自身の研究テーマである、経営におけるダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(多様性、公平性、及び包摂性: DE & I)の研究者を国を超えてネットワーキングするセッションでした。2件目は、“Global Perspectives on Neurodiversity and Work”というDE&Iのテーマの中でも特に経営学では比較的新しい分野の“脳・神経の多様性(ニューロダイバーシティ)”をテーマとしたセッションです。特に、2件目のNeurodiversityのセッションでは、多様な国からの参加者に対し、オーストラリアの大学の研究者、インドの研究者と一緒に、テーマに沿って議論をリードする役割を担いました。その中では日本の文化的背景等、日本の視点を通して語ることを期待されており、つくづく自身も日本をよく理解しておかないといけない、と実感した次第です。私の専門は日本企業におけるDE & Iですが、その分野だけに限らず、政治、経済、社会、様々なことに常に興味関心を幅広く持つておくことの大切さを改めて認識しました。

もう1つの気づきは、継続は力なり、ということです。日本人のある研究仲間に、以前から「AOMは継続参加が重要」とアドバイスを受けていましたが、今回、それを実感しました。主催者側として参加する貴重な機会は、実は昨年及びそれ以前のAnnual Meetingへの参加があったからこそでした。昨年、こ



Neurodiversityセッションのorganizerの、アメリカの研究者と。昨年以来の再会でした。

れら2つのセッションの前段となるセッションに、私自身はいち参加者として勉強と情報収集のために参加していました。そこで話をしたり、紹介してもらったり、後に自身の関連論文(日本語でしたが)を紹介しつつメールを出したり…と交流を続ける中で、グローバルネットワークが広がり、今回の貴重なオファーを受けることに繋がったのです。学会への出張は、発表しない場合には何となく行きにくい…という風潮が日本にはあるように思います。ただ、このような質の高い学会に「継続して」参加することでネットワークが広がり、そこから新たな共同研究やプロジェクトへの参加の声がかかる、ということを今回、身をもって感じました。実際に、ファシリテーターと一緒に担った海外の研究者は、研究分野の興味関心も似ていることから、帰国後に今後の共同研究・共同執筆に発展しそうな交流が続いています。どんな関係性も、知り合うことが無ければ始まりません。そのような意味で、発表セッションだけでなく、様々な研究者向けのセッションがあるAOMへの継続参加は、大きな意味があるのだと感じます。

3. Session と AOM への参加意義

さて、次に参加者として出席したPDWについても少し触れたいと思います。このように色々書いていても、私はまだ海外雑誌への投稿はこれからです。AOMでは、英語が母語でない人に向けてのトップジャーナルへの投稿セッションや、特定分野や方法論での投稿指導のセッションも様々な規模で行われます。私もいくつかそういったPDWに参加しましたが、あるDE & I関連のセッションで、セッション後にオーガナイザーに投稿のことを聞いてみたところ、その分野では非常に有名な方であり、大変有益なアドバイスを受けることが出来ました。また、知り合った研究者が先行文献の著者だった、というような出会いも何度かありました。このように、「先行研究や本で参照した著者」や「経営学の教科書で触れている著名な研究者」も普通にいて話を聞くことができるのも、AOMに参加する醍醐味だと感じます。

なお、AOMでは、インタラクティブな交流ができるフリースペースが多く設けられています。そこでは、無料のコーヒーなども設置されています。今回は日本からも多くの研究者が来られており、日本のアカデミアのネットワークで既知である方、そうでない方も含めて、セッション内はもちろん、セッション間にフリー

スペースで、深い交流ができたのも印象的でした。

そのような日本人の研究者との交流の中でも、とても印象に残った話があります。今回のAOMで、その方が海外の研究者と一緒に、話をしていた時に、「日本人の研究者は、英語の文献を沢山レビューするのに、研究成果の英語での発表や執筆が少ない。それは一方的な搾取ではないか」と言われたそうです。これには自身も「はっ」として深く考えさせられました。研究成果はリーチされるところにないと、理論的にも実践的にも貢献にならない。また、思った以上に海外の研究者は日本の文脈における研究に興味を持っている。そういった意味では、国内の学会発表や論文投稿だけでなく、海外に日本文脈での研究を英語で発信していくことは、私たち日本の研究者のある意味義務であり、今後、意識を高める必要があることなのかもしれません。もちろん分野や内容から、日本で多くの人々に読んで頂く方が貢献が高い論文もあるでしょう。しかし、海外にも貢献できるものは、グローバルの研究コミュニティにも発信し、貢献を意識する必要性を感じました。そしてそれが、日本の研究の発展にも大きく繋がるのではないのでしょうか。

例年、AOMは7月下旬から8月上旬という、日本の学年暦からすると微妙に難しさが増すタイミングで開催されます。しかし、日本の研究機関としての大学で働く研究者のプレゼンス向上に向け、継続して参加し続けることが重要であると改めて感じています。大学及び研究者としてのプレゼンス向上、グローバルへの貢献、そして自身の研究力を上げるためにも、教育活動の調整を最小限に心がけつつ、来年度以降もAOMへの参加を継続していきたいと考えています。